入学・テスト・幼稚園

竹田俊雄
瀬川良夫
武田一郎
小口忠彦

幼稚園から見た小学入試

竹田俊雄

1

小学校の入学試験というものは、日本のこども全体から見たら、片隅の問題である。入学試験というか、とにかく児童を選抜する小学校は、国立および私立の小学校であるが、現在国立校は七六校、私立校は一三六校あるだけで（昭和二十九年五月現在）しかもこの中の少数はその成立の特殊性からそうした選抜を行わない仕組になっているものの、それらの学校を含めても、国立校の一年生は七七一一名、私立校の一年生は八八四九名、合計一六五六〇名で、日本中の一年生総数二五五三五二九名にくらべれば、〇・六パーセントばかりである。もちろんこうした小学校の受験生は、その一六五六

○名の何倍かになろうが、逆にこの種の学校が二校以上あるところでは同一の幼児が何校も受験することも多いので、その実数はつかめない。そこでたゞ○・六パーセントの何倍かの受験生ということにしておくが、この程度であるから、平均的に見れば本当にささやかなことであり、こうした小学校が近くにない地域ではどうしてこのようなことが取り上げられるのか、理解に苦しむであろう。

ところが国立や私立の小学校――かりに特殊校と呼ぶこととするが――が多いところでは、これへの志願者も多い。小学校側ではいろいろなやり方で選抜をする。抽せん法が用いられる場合もあるが、大ていはいわゆる知能検査を主として性格の観察、それに身体検査や親との面接あるいは書類による環境調査が行われる。選抜である以上、選抜する側ではその学校で考えたある一定の条件に合致しないものをできるだけ排除して、よりよいものだけを選ぼうとし、選抜される側ではできるだけよりよい条件をととのえようとする。よりよい条件をととのえるために、そこにいろいろな準備が行われるようになるわけである。

2

けれども受験生は幼児である。こどもはまったく受身で、特殊校へ志願させるのもその親であり、準備を行うのも親がイニシャティヴをとる。兄姉がその学校へ通っていれば、自分もそこへ通うのがあたり前のことと考えていようが、普通の場合は「あなたは××を受けるのですよ」といわれてそう思うのであるし、試験のお勉強をしていても、何でそのようなことをしているのか、わかっていないことさえある。特殊小学校の入試については、こども自身は一個の人形であって、それを操つるのはその親である。

親はこの場合こどもの合格しか考えない。こどもを目的の学校に入れるために、できるだけこどもを有利な状態に置こうとする。多くの入学試験に知能検査やそれに類する方法が用いられるのを見て、知能検査のようなものを反復練習させたり、いろいろ皮相的な知識を注入したりする。型にはまった応答の態度が訓練される。これこれの問題が出されたことがあると知ると、やっきとなってそれをこどもに教え込もうとする。試験の日のさしせまった親、殊に母親は神経症的である場合が大部分である。

この特殊校を受験する幼児が通っているのが幼稚園である。幼稚園の経験のない特殊校志願者はごく少数である。どうかしてこどもを合格させたいとひたすら願う親の態度はそのまま幼稚園へもち込まれる。試験のための勉強が保育の中に要求される。そうすることがこどもの幸福であると単純に考えている先生、幸福かどうかはわからないが、そういう親の希望をかなえることが世に生きる道だと思っている先生、さらに特殊校入学率の多少が園の盛衰にかかわると喜憂する経営者は、こうして入試のための準備教育に大わらわになる。そして「幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」ような幼稚園は、このような親達

からはすこぶるたよりなく見られるのが、現状であろう。否、その親達だけならまだしも、幼稚園教育というものが、このような準備教育的なものだと、一般の人々も、うっかりすると保育者自身までも考えてはいないだろうか。

3

このように幼稚園教育は、ある範囲ではかなりひどく特殊小学校の選抜試験によってかき乱されている。これを改めるために、志願者をすべて抽せん法のみで選抜せよという論はたしかに一理ある。幼い時から偶然をもって事を決めるのは好ましくないというならば、鬼ごっこにじゃんけんを用いることも禁じなければならないし、第一こどもがそうした学校を志願させる家庭に生れ出でたことは何であろうか。こどもの立場から、その心身の発達にとってマイナスになるような準備教育を受けなければならないとしたら、抽せんは最善の方法であろう。

けれども特殊小学校というものの存在を、普通の公立小学校以外に是認するならば、問題はなかなか復雑になる。教育研究のための実験学校であるはずの国立の附属小学校が、優秀児ばかり集めるとすれば、これは研究計画の無能をあらわしているばかりで、まともな議論にならないが、その時々の研究課題に応じてひとり子という条件で選抜したり、無作為抽出で入学させたりすることは、当然あつてよいことである。（その意味である限りは天才児研究も結構であるが、そればかりでは日本の教育の研究にはならないわけである。）また私立小学校が独自の教育目標をかかげ、特色のある教育法によつて教育するために、その理想に合致する父兄を集め、その条件にかなうこどもを選抜することも、私学を認めるという建前からは肯定できることである。これらの考え方の根底には、義務教育である小学校教育は公立が本体であり、それは無差別に入学させるという前提があるわけであるが、それを前提として特殊校の選抜がそれぞれ独自の意味において認められるのである。

4

特殊小学校の選抜試験というものは、試験を行う学校側も、そこを志願させる父兄の側も、こうした考えをもつているならば、かなりの程度に緩和される。ところが現実はこれから非常にへだたっている。それは学校側の無策か、父兄側の盲目か、あるいは社会の責任か、はっきり区別することはできかねる。少くても公立小学校の設備その他の不十分ということが、多くの父兄の心を特殊校に向けさせている。その親達はその資力を集めて地域の公立校を改善しようというような気持は絶無といってよい。教育委員の子弟はこうした地方ではどんな小学校に入学しているものが多いか、調査して見たいとも思う。

親がその子をどの特殊校に志願させようとするか、学校の多い土地では、A国立校、B私立校、C私立校等々、一人の子にまったく

校風のことなった学校を考えもなく受験させる場合がずいぶん多い。親にとっては特殊校でありさえすれば、校風はほとんど問題でない。私はそれほどまでに現実に校風が消滅したとは思っていないが、こうした親と相談などで話していると、二等切符なら何行の列車に乗れてもいい。あのごみごみした三等車だけはおことわりだといっているように聴える。

こうした特殊校に入学させておけば、多くの場合ずっと大学まで無試験で行けるというのも、これを志望させる親の気持であるが、それだからこの子はあまり頭がよくないだから大学へ入る時苦労させるよりも小学校へ入る時苦労させておく方がとなると、将来が思いやられるし、第一その程度の知能では小学校の選抜試験が見込みがないのに、親は大発見をしたように得意でいられると、こどもが痛々しくなる。

5

特殊小学校の入学試験の問題は簡単には解決しない。入試に伴ういろいろの弊害はあっても、入試そのものはまず近い将来にはなくならないであろう。そこで幼稚園側に立つものとしては当面の対策として、第一に特殊小学校の教育というものがどのような意味をもつものであるかを父兄によく理解させよう。第二には特殊校の現実の選抜条件をよく考慮して、それに合致した場合だけ志願に同意しよう。第三には試験問題集を練習するような附焼刃的なやり方でなく、こどもの生活経験に即した保育をして、こどもの心身の発達を助けよう。こどもが健全に発達すれば当面する問題は無理がなく解答できるものである。ここに小学校側に希望することは、試験にはこどもの身についた能力を調べるようなやり方を大いに研究していただきたいことである。

（愛育研究所員・東京文化幼稚園副園長）

18頁より続く　カタチを全体的にみることができるか、注意力が持続するか、などの点をしらべるために菱型の図を模写させるわけですが、この問題ならば、かなりまでその目的がみたされる、という自覚をもつていることは大切だというわけです。

（お茶の水女子大学教授）

淀の川瀬の

——わらべうた——

淀の川瀬の水車
どんどこ落ちるは滝の水
ぽちゃぽちゃ落ちるはお茶の水
子供や子供や臍かくせ
今に雷鳴ってくる。
ごろごろごろごろ

（東　京）